8月・9月の詩

二〇二五年八月朔日から九月末日

桜木心都悩

短歌

街頭に集る虫の子チラチラと命燃やして羽根落とす

この道で子持ち蟷螂潰された赤い尾を引く黒いタイヤに

遥か海琥珀飲み干さんボアモアを牧水の詩に恋焦がれつつ

一人でいるのは孤独でしょうか
二人でいるのは孤独だったからでしょうか
三人でいるのは孤独ではないでしょうか

本を読むのは孤独だとあの人は言いました
絵を描くのは孤独でしょうか
歌を唄うのは孤独でもできますか

手を繋いだら孤独を埋められますか
「孤独」の癖に一文字じゃないのね

別れの前にはいつも水の流れる音がする
手を離さないでと思うけど
私が強く握るだけじゃ意味が無い
そうして指が一つづつ離れていって
二人の間を流れる水が増していく
別れの前にはいつも水の流れる音がする

尊敬は裏返せば情に
執着は裏返せば無思考に
世界は無常ではいられない、無情ではいられない
酒場の囀りを聞きながら
味のなくなった酒の惨めなこと！

酒の畑で焚き火が燃える！
星を線で繋ぐなど、孤独な人のすることだ
バーの片隅で言葉を拾う
私は浮浪者、酒を煽って

酔う。泣く、笑う
酔う、泣く、笑う
歌えや歌え、死ねど歌え
ぐるぐる世界が回る
回るんだ、死ぬのに
死んでしまえ、こんな世界
死んでしまえ、こんな自分
飲み屋の代を忘れた自分も
隣の恩を忘れた自分も
全部全部、明日には消える
酔う、泣く、笑う
明日なぞ来ないよ
まだ一度も明日を見た事がないのだから

植物が水を求めて徒長するように
人間も足りないものを求めて大きくなる
周りに何も無い方がいいのだ
そうして自分に足りないものを見つめ続けよう
誰よりも大きく、昨日よりも大きくなりたいのなら

作品が我が子であるならば
作者は聖母マリアの導きをもって
美を求め魂を削る

我々は遂に全盲になってしまったのでした
古代から闇を恐れ光を求めてきた我々に
光ばかりの現代は生きづらすぎる
闇に安息を求めようにも
幾千年、闇を恐れてきた我々は
理性が闇を拒むのです
光に安息が無くなった
闇にもまた安息はない
死は、無色
黒でも白でもないただ無色